

目次 Enhavo

はじめに	峰 芳隆	7
第1部 運動を考える		
エスペラント運動の目的はなにか	小西 岳	8
エスペラントは過去のものでしかないのか	柴山純一	11
モバードは「古いこと」ばかり書いているか	宮本正男	13
エスペラント百年の無形の実績	小西 岳	15
運動をささえる理念	山口真一	17
「やさしい言語」だけでいいのか	峰 芳隆	19
エスペラント大会の存在理由	サカモト ショージ	22
運動の後継者づくり	竹内義一	28
エスペラントを学ぶことの意義	北川昭二	36
愛妻への最良の贈り物	岡本三夫	40
第2部 ザメンホフを考える		
ザメンホフを思う	野島安太郎	42
ザメンホフ没後60年に思うこと	藤本達生	44
読書はエスペラントを育てる	小西 岳	47
ザメンホフの三つの功績	小西 岳	49
ギルドホールで考えたこと	小林 司	51
ザメンホフと人類主義	三宅栄治	55
ザメンホフのユダヤ性	三浦伸夫	57
他者の苦しみを理解すること	野々村 耀	61
ザメンホフさんへ	藤巻謙一	62
ザメンホフの答え — 戦争責任と民族	タニ ヒロユキ	63

第3部 ザメンホフを読む

“Esenco kaj estonteco de la ideo de LI”	藤巻謙一	67
“Paroladoj de D-ro L. L. Zamenhof”	相原美紗子	70
“Post la Granda Milito”	高杉一郎	73
わが『ハムレット』	山口美智雄	76
“La rabeno de Baĥaraĥ”	伊藤俊彦	79
“Pri jida gramatiko”	タニ ヒロユキ	82

第4部 平和を考える

エスペラントは平和のコトバか？	宮本正男	85
「平和のコトバ」－ 何がいけないのか	サカモト ショージ	87
平和学から見たザメンホフ	寺島俊穂	89
書評『エスペラントと平和の条件』	藤巻謙一	93
「平和」を心で捉えたい	土居智江子	95
人権としてのエスペラント	ドイ ヒロカズ	97
被爆の記録『広島・長崎』エスペラント版	東海林敬子	99
“Notoj pri la Delto”おぼえがき	サカモト ショージ	103
アジア大会で「ベトナム戦争」の分科会	西尾 務	105
ヒロシマから平和の呼びかけ	忍岡妙子	108

第5部 民際語を考える

エスペラントは「民際語」でないか？	宮本正男	110
「民際語」の民について	藤本達生	114
宮本正男の民際語論と私の民際主義	タニ ヒロユキ	117
書評『エスペラントとグローバル化』	三浦伸夫	120
民族の自立と言葉	柴山純一	122

第6部 民際活動を考える

ソウルの街角で - UK参加記	染川隆俊	124
日韓共通歴史教科書の会	三宅栄治	127
第2回日韓関係史シンポジウム報告	西尾 務	130
『日中韓共通近現代史』の翻訳出版	佐藤守男	134
ユネスコとエスペラント運動	江川治邦	137
私の場合の文化交流	蒲 豊彦	140
フランス語なしのフランス民際旅行	忍岡妙子	143
聞いて触って踊ったポーランド	岡部明海	146

第7部 言語を考える

“Fundamento de Esperanto”の100年	川西徹郎	148
Ambaŭ estas bonajの思想	松本 清	151
エスペラントの長所とは何か?	松田克進	155
エスペラントの単語力とは何か?	松田克進	157
vortojn, vortojn, vortojn	染川隆俊	159
オーウェルの『1984年』とエスペラント	タニ ヒロユキ	162
常用漢字表の「公害」	サカモト ショージ	168
解説	寺島俊穂	170
執筆者紹介		176